

共に北海道の未来を創る－第9期北海道総合開発計画の推進－

共に北海道の未来を創る
第9期北海道総合開発計画



第9期北海道総合開発計画では、我が国の課題解決に貢献するため、従来の北海道の強みである「食」、「観光」を一層強化し、「脱炭素化」におけるポテンシャル等の北海道が持つ資源・特性を最大限に活かすとともに、それらの北海道の価値を生み出す「生産空間」を維持・発展させることとしています。

釧路開発建設部では、北海道が我が国に貢献するための土台を固め、北海道の価値を更に高めるため、官民の垣根を越えた多様な主体と共に北海道の未来を創る「共創」により、各種施策を推進してまいります。

「生産空間」とは？

北海道の特筆した価値を生む地域を、開発計画ではその「生み出す力」に着目して「生産空間」と呼んでいます。

●北海道の価値を生む「生産空間」の分布



「生産空間」を守る主な共創の取組

●地域を支える次世代に向けた共創の取組

建設業の人手不足が深刻化しており、今後の社会基盤整備、構造物の老朽化、災害時の緊急対応等、安全・安心な地域づくりのためにも、建設業の人材育成・確保が重要な課題となっています。

また、建設業だけではなく、他産業も同様な課題を抱えており、特に将来地域を支えていく次世代に対して、開発行政と地域産業の発展の歴史等について理解を深め、興味・関心をもってもらえるよう、各産業関係機関、教育機関等と共創の取組を進めています。

〔取組概要〕

○開発行政と地域産業への理解を深める現場見学会や事業説明会等の実施（Teamくしろ、TEAMねむろ）等々

※Teamくしろ、TEAMねむろ：釧路開発建設部の出先機関である河川・道路・港湾・農業部門の事務所職員で結成されたチーム



山花小中学校での「Teamくしろ」道路・農業部門合同現場見学会の様子



●地域を再発見するための共創の取組

「インフラが支えた地域発展の歴史」を柱に、地域の「歴史、産業、文化、食」といった様々な要素を取り入れ、地域と調整しながらストーリー作りを行い、関係機関と連携してツアーを実施していくことで、インフラを観光資源とし、地域活性化のためのツールの一つとして幅広く活用されることを目指した「地域共創インフラツアー」を実施しています。

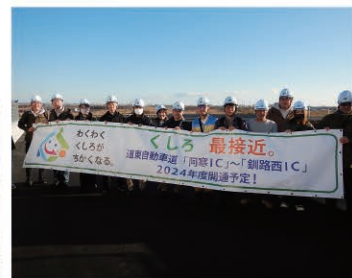
●令和6年度に催行した地域共創インフラツアーは以下のとおり

ツアー名	ツアー催行日	参加者数
釧路川と釧路発展の基礎となった産業の歴史	令和6年10月20日（日）	13名
阿寒発展の基礎を築いた輸送路の発達を学ぶ	令和6年10月23日（水）	20名
日本の酪農を支える根拠地帯を学ぶ	令和6年10月31日（木）	12名

3本のツアーを実施し、合計45名の方に参加いただいています。



旧岩保木水門(写真左)と道東道釧路西IC(写真右)での記念撮影の様子



管内の概況

釧路・根室管内は、北海道の最東端に位置し、南部は太平洋、北部は阿寒・摩周・知床連峰、西部は白糖丘陵、東部はオホーツク海に囲まれ、世界自然遺産でもある知床、阿寒摩周、釧路湿原の3つの国立公園、厚岸霧多布昆布森国定公園及び野付風連道立自然公園を擁するなど、雄大で魅力ある自然に恵まれた地域です。

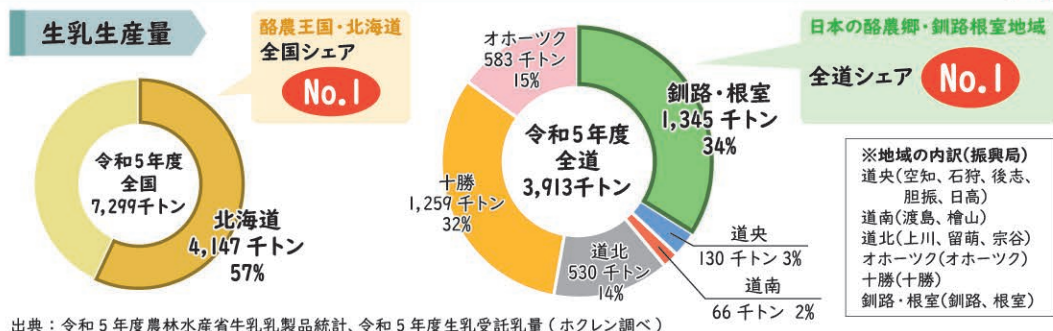
春から夏にかけて海霧が発生し、湿潤冷涼な日が多く、秋から冬にかけては、大陸性高気圧の影響により晴天の日が続きます。

日本の酪農郷と呼ばれ国内有数の酪農地帯を誇る「農業」や、令和5年、6年に2年連続で水揚げ量日本一を記録した釧路港を始めとした「漁業」などの農林水産業が盛んな地域であるほか、幕末に開港した函館港へ石炭を供給するため、1856年に釧路市益浦の海岸で北海道初の石炭採掘が行われ、現在も海底から石炭を生産しています。近年では雄大で魅力ある自然などの地域資源を活かしたアドベンチャーツーリズム等の取組が進められています。また、我が国固有の領土である北方領土に隣接した地域です。

世界銀行が認めた先進的事業－根釧パイロットファーム－



昭和30年頃 開墾の様子
写真提供：別海町郷土資料館蔵



北海道に美味しいものは数多くありますが、全国に「北海道」の名を知らしめている代表格の一つと言えば「牛乳」です。北海道各管内で乳牛が飼われています。その中でも根釧台地で生まれる牛乳は、広大な牧場の風景とともに、全国ブランドです。そして、酪農王国・北海道の起源も、釧路・根室管内にあります。明治時代の開拓期、根釧台地に入植した人たちは、冷涼な気候に適する酪農を始めました。その後も、北海道庁による積極的な酪農振興が進められましたが、大きな転機となったのは、昭和30年から始まった「根釧パイロットファーム」事業です。

この事業の特徴は①世界銀行による融資を受け、②大量の大型土木機械投入による工期の短縮と入植者の住宅整備が出来たことです。戦後、疲弊した我が国にとって、自力での大規模開発の資金調達はなかなか難しく、世界銀行の融資実現によって、酪農王国の基盤が築かれましたが、家畜伝染病の発生など様々な困難を乗り越え、現在も継続している土地改良事業、酪農家の品質向上に向けた取組、そして釧路港発のRORO船輸送による首都圏への販路拡大など、関係者との共創の取組が実り、本管内が酪農郷として日本の「食」を支えています。